

学校俳句研究 No.4

☆日本学校俳句研究会☆会報 平成25年5月

感性と知性を育む俳句活動を全国の学校へ広めよう

日本学校俳句研究会 副代表 永海 尚二

「隠岐やいま木の芽をかこむ怒濤かな」（加藤楸郎）の句で有名な隠岐の島から発信します。四年前から小学校で、全校俳句活動を行っています。ねらいは、子どもたちが隠岐の豊かな自然に目を向け、それを十七音のこぼれで表すことにより、豊かな感性と確かな知性を育むことにあります。「感性を育む」ことは、知育・徳育・体育の基盤として、島根県の教育においても重視されています。そこでは、「感性」とは、「ひと・もの・こと」に出会った時に五感を通して得た感覚を自らの体験や経験につなげ、その意義や価値に気付く力」と捉えています。ある時担任が出張で、一年生を外に連れ出し、俳句を作ったことがありました。海を見たり、山に登ったりして作りました。その時出来たのが、「冬晴れに海の中まで空の色」です。「今日のような冬でも天気がいい日は、冬晴れと言ったよ。」と季語は教えました。中七・下五は、本人が観たままをこぼれにしました。感じたことをこぼれで表すことを繰り返すことにより、感性は育まれます。「知性」とは、「思考力・論理的な問題解決能力であり、認知能力の一つ」として捉えることができます。「思考力・判断力・表現力の育成」は、新学習指導要領が目指しているところです。二年生のある児童は、毬に包まれた栗の実を俳句にしようと考えました。いろいろ考えているうちに中の栗の実が兄弟に見えてきました。そこで、「くりさんはいがでなかなよし三きょうだい」という句を作りました。感じたものをどう表現すればいいのかと思考を巡らすことを繰り返すことにより、知性は育まれます。

感性と知性を育む俳句活動を全国の学校へ広めたいものです。

（島根県隠岐郡・知夫村立知夫小学校長）

勉強会月例会紹介

勉強会とは、毎月第一木曜日の午後六時半〜八時、江東区立八名川小学校で行っています。

私たち大人も、俳句作りの楽しさや難しさを体験して、教室での俳句指導に生かそうというのがねらいです。

毎回十五名〜二十名の参加者があり、楽しく学び合っています。見学だけでも大丈夫です。どうぞお誘いあわせの上お気軽にご参加ください。

二月〜五月の高得点句を紹介します。

二月勉強会

水仙を包みやさしい紙になる 田付賢一
 小さき手ゆゑの小さき雪礫 近藤孝
 校庭に水使ふ青春立てり 山本新
 真下には活断層や寒牡丹 知念哲庵
 人はみな海に出てゆく雪解川 今野龍二
 初笑い寄席に忘れし悩み事 瀬在恵里

三月勉強会

明日からは先生になる春休み 山本新
 宿題をカプセルに容れ卒業す 金子嵩

故郷のとなり村まで春夕焼 土田知子
 春疾風願ひ切なき絵馬鳴らす 田付賢一
 春光や海風届く新校舎 永海尚二

四月勉強会

新入里家でもしよつてるランドセル 鈴木正美
 行く春の鳥類図鑑遊ばせて 今野龍二
 新入生硬い服着て硬い顔 石津あや
 迷題に耳打ちされて塾さぼる 金子嵩
 新しい弁当箱に花見寿司 吉岡佐登美
 前を向く高倉健や春北風 山本純

五月勉強会

薫風や初めて投げた変化球 山本新
 引き算が今も苦手な塾坊主 川辺幸一
 風薫る立ち入り禁止の芝生かな 小山正見
 漱石と同じはおつえ春夕焼 大熊拓

六月勉強会は6/6（木）です。

学校俳句研究④ 発行日 平成二十五年五月五日／日本学校俳句研究会
 代表者☆小山正見 編集者☆山本新 松本芳明 下山桃子 イラスト☆瀬在恵里

【編集後記】

慌ただしい四月があつという間に過ぎたかと思うと、また慌ただしい五月が訪れました。そう考えると慌ただしくない季節など、私たちにはほぼ無いに等しいと言えそうです。

忙しく過ごしていると、風向きの変化や、空の青さの移ろいや、道端の草花の可憐ささえ見落ししがちです。

日本は美しい国です。豊かな自然と文化を綿々と受け継いできました。俳句はそれらを再発見する虫眼鏡です。全ての子ども達が、この虫眼鏡を持って町に、野原に、山に、海に出たら、もつと日本のことが好きになるはず。俳句にはそんな力があるように思います。

つばめ来る海洋学部の新校舎

山本新

【日本学校俳句研究会】

<http://gakkohaiku.sitemix.jp/>

連絡先 江東区教育委員会学校支援課

小山正見 oyamamasami@gmail.com

俳句指導実践講座①小学校編

「五七五マン」参上!

新学期が始まり、新しいクラスや新しい学年に胸躍らせるこの時期、どの子もやる気に満ち溢れています。折しも季節は爛春から初夏へ。新緑の眩しいわくわくする季節です。

こんな時期、子ども達に俳句との楽しい出会いを演出しましょう。

初めて俳句に出会う子ども達には、俳句の定型「五七五の十七音」と「季語」の二つを教えるは十分です。

「五七五マン」参上

先生が五七五マンに扮して教室へ登場します。五七五マンは話す言葉が全て五七五なのです。「先生の話す言葉は五七五」「そのときのみぞ見をしてはいけません」「見てこらん窓の外には鯉のぼり」

子ども達から「あ、先生、俳句みた

い」の声が出たらしめたものです。

そして俳句の決まり五七五のリズムを教えみんばで練習します。子ども達は大喜びで、五七五で話します。

「季語レッスン」登場

翌日の先生は季語レッスンです。季語レッスンは春の季語を教えます。子ども達から春らしい言葉を聞いて黒板に書きだしていきま。そして最後に「季語」という言葉を教え、俳句には一つの季語を入れることを伝えます。

これで「五七五の定型」と「一つの季語を入れる」という俳句の大きな約束事を教えたこととなります。

ちなみに季語レッスンは、夏は「ル」、秋は「エロ」、冬は「ロ」と、一年間で四人登場します。

(足立区立千寿小学校・山本 新)

俳句指導実践講座②中学校編

「中七の『の』大作戦」

春の雪清少納言の声がする 川辺幸一

こんべいと祇園祭の京都より 長谷川權

句集や俳句雑誌を眺めてみると、切れ字が使われている俳句とともに、例句のよつに中七の最後に「の」が上手に使われている俳句を意外に目にする。

小学生や中学生は俳句をつくり始めた頃、次のような句をつくる子がけっこういる。

ひまわりがきれいに花を咲かせます

説明的であったり、同じようなことを言いがちである。そんなときに中七の最後に「の」を入れる型を紹介すると少し改善が図られる。

ひまわりはひとみの先の指定席

実際に中七に「の」を入れてつくってこらんとすると、子どもたちも最初はなかなか戸惑いが見られる。しかし、いくつかの例句を知ると、少しずつ変化が見られるようになる。(もちろん無理強いる必要はまったくないが)俳句をつくるのに慣れてきた子には、中七「の」を意識して俳句をつくることは面白いものだ。この「の」を意識すると俳句のつくり方が、ちょっとかわるのでやってみる価値はある。

今回は「の」を取りあげたが、(格助詞を中心に)「ひと文字」の助詞は、だいたい十個前後である。そのどれを使うかは、推敲する段で指導していきたいことでもある。子どもたちにとって、いろいろな機会を通して、たつたひと文字が、やれどひと文字だと気づく日がくるといいなと思ふ。

(川越市立福原中学校・山本純人)

第十回学校俳句交流会

六月二十九日(土)午後一時〜五時
江東区立八名川小学校★図書室

日本学校俳句研究会では年に二回、「学校俳句交流会」を行っています。「学校俳句交流会」では、俳句指導の実践交流や講師を招いての講演を行います。六月は下記の内容です。

◆足立区立立沼田小学校教諭 土田明人先生
講演「心を耕す ～授業・ゲーム、スポーツ…そして俳句～」

◆足立区鹿浜第一小学校教諭 松本芳明先生
講演「句会で笑顔 ～特別支援教育に俳句・句会を～」

◆足立区立六木小学校教諭 大熊拓
講演「体験句会」

◆土田明人ミニコンサート

※詳細については関係各学校および関係機関宛に案内を送付致します。

日本学校俳句研究会夏期宿泊研修会

期日☆八月十七日(土)〜十九日(月)

場所☆宮城県南三陸町および登米市

内容☆俳句指導講座、吟行体験、季語探索(天の川、夏雲、花火、麦藁帽子…)

参加費☆俳句指導に興味のある方。職種等問いません。どなたでも可です。

※詳細はメールにて近日中に、ご案内を送付致します。参加希望者は六月七日(木)までに幹事・山本新までご連絡ください。

連絡先☆aakky.yamamoto@nifty.com

季語の世界①【亀鳴く】(春)

亀は鳴きません。亀には声帯が無く声は出ないのです。けれども古来、晩春の夕暮れ時にどこからか寂しげな亀の鳴き声が聞こえてきそうな風情を日本人は好みました。これは日本人の幽玄を尊ぶ感性が生み出した想像上の産物なのです。日本人の感性つて素敵ですね。

亀鳴くや古書肆に探す初版本 新